

インタビュー シリーズ

僧侶、チャプレン 笠原俊典さん

取材日2021年3月26日



緩和ケアというのは、これまで大事にされてこられた価値観がすべて失われていって裸一貫になっていかれるんですね。そういう中であって、大事なものを模索されていく機会であったりもする。そういうところに接させていただき、私自身すごく、その人の生き方に感化されていくということがありますね。

長浜市の持専寺住職 笠原俊典さんにお話を伺いました。笠原さんは、死と向き合うがん患者らに寄り添う宗教者「チャプレン」になるために、キリスト教の聖職者に交じって米国で資格をとられ、現在「チャプレン」として病院で勤務されています。

※チャプレン

病院や学校など、教会以外の施設や組織で活動するキリスト教の聖職者。病院のチャプレンは、患者や家族のケアにあたる専門

職としてチーム医療に参加するほか、スタッフのケアも行う。

仏教に触れていない方に対して、自分がいかに出会っていいのか、ご縁を頂けるかということに思いがあり、海外で僧侶としての学びを始めました。

Q チャプレンとは、どんな役割でどういったお仕事でしょうか？志そうと思われたいきつかけは？

笠原さん 私は寺の生まれで、小学校ぐらいの時、寺にホームレスの方がいらっしやっただんですね。当日うちの家がすきやきをしていて、たぶん匂いに誘われていらっしやっただんどうと思います。その時に母親が、善意ですが、パンをお渡ししてお帰りくださいました。そして翌朝、お寺の縁のところにそれが置いてあって、私が見つけたんです。それが子ども心に結構ショックで。

子どもながらに私自身、お寺の役割というのは、弱い立場の人に対して、いかに共に生きることが出来るか、そこでご縁を持たせていただけるかというのが非常に大事だと思っていたんですね。けれども、お寺というのはご門徒さんだけが中心で、寺のあり方に少し疑問を感じるころがあったんです。それで大学卒業後、海外を見

てみたいという思いと、仏教に触れていない方に対して、自分がいかに出会っていいのか、ご縁をいただけるかということに思いがあったので、海外での僧侶としての学びをはじめさせていただいたんです。

ハワイ島に開教使として着任することになったんですが、そこでの活動は、結構日本の活動とは違ったところがあって、向こうはやっぱりキリスト教文化の中にありますので、生活の中心に宗教が置かれているようなところがあって、お葬式だけじゃなくて、結婚式も仏教が司れば、学校への入学とか、折り目折り目の行事に参加することとか、慰霊祭とかの公的な行事に参加することもあったんですね。おもしろいのが、州議会でも宣誓をするのは宗教者の役割ということもあったんですけど、その中の役割の一つに病院訪問というのがありました。普通の公立の病院に行って、そちらで仏教者リストっていうのを渡されるんですね。その仏教者リストに載ってらっしゃる方の病室にお邪魔して、ご相談に乗らせていただくというようなことをするんだと、最初そう言われたんですね。病院には、チャプレンという方がいらっしやあって、その方は宗教に関係なく、もちろんその方の信仰心は大事にしておられるんですが、接する方々に対しては、宗教や信仰を強要するというのはなく、優しく相談に乗られたりとか、悲しい時に一緒

に時間を過ごされたりとか、そういう方がいるっていうことを知って、すごく感化されたんですね。私もああいう風になりたいと。その時に思い出したのが私の幼少期の思い出で、万人といたら大げさですけど、特定の人ではなくて全ての人に対して接していける、哀しみがある時には、そこに一緒に哀しみを共有できたりするとう、そういうふうな世界観が病院の中にはあると気付かされたんですね。

最初はむこうの開教区の僧侶としての役割と、一方で、病院に週に1、2回行かせてもらいながら、病院で研修させていただいておりましたが、より実践的な活動がしたいということで、僧侶として開教使としての仕事は一旦辞めさせていただいて、ホノルルのオアフ島に居住地を移してそちらの方で本格的に、チャプレンとしての勉強を始めさせていただきました。

病院では、いろんな病棟を担当するんですね。日本ではチャプレンとか臨床宗教師は、緩和ケア病棟だったり、死の現場でお仕事させていただく、もしくは災害現場で心のケアを担われるということが多くですけど、欧米では当たり前にどこの病棟も担当します。少し日本での宗教者の役割とは違って、いるかなというふうに思います。病気がない、心の病気がない方もやっぱり苦しむとか人間の重さを背負っておられるんですね。そういうふうなところに

寄り添っていくことがとても大事なんだなということと、そういうふうな中で自身も本当に人と人が接していける、共感していける現場なんだなということを感じていただいたと思います。

むこうのチャプレンの制度というのは、各宗派というか、各宗教団体がチャプレンの養成機関を持っておられるんですね。たとえばカトリックとか、聖公会とか、そういう大きなところというのは、各宗教団体がチャプレンの養成機関を持っておられるのと、同じように、アメリカの教育省の傘下でいろんな宗教団体が集まって、そういう中でチャプレンの養成を行っているんですね。私は後者の方で勉強をさせていただいたんですね。もしできれば他州でもお仕事をさせていただきたいなと思って、いた時期だったんですが、お寺の跡継ぎとしての役割もあり、日本に戻る決心をして戻ってきたんです。それがちょうど20年前ぐらいになります。

日本の医療の現場においても、こういうふうに話を聞かせていただいたり、患者さんに寄り添う者というのが絶対に必要だから、その立場という役割を普及していきたいという思いがありました。

Q 日本に戻られてからのご活動は？

笠原さん 私自身は、日本でもこういうふうな活動って非常に必要なんじゃないかなと思っただんですね。日本でも仕事をやる機会を得たいと思っただんですね。それが私の僧侶としての仕事でもあったんですね。その時に紹介していただいたのが、当時は病院はまだ難しい状況で、臨床宗教師という資格もその当時はまだなかったかもしれないですね。それで、福祉施設の方で生活相談員という立場でチャプレンというものも一緒にやってみようという形です。高年齢者福祉の現場でお仕事をさせていただいたんですね。

それとは別に、今、滋賀県でもありますが、がん患者サロンというのがちやうどその頃、拠点病院とかにできてきて、日本のがん医療の中で新しい動きがでてきたんですけど、患者サロンで、患者さんが定期的にいらっしやあって、いろんなお話をされたりとか、つらさを克服されたりとか、そういうふうな現場に一緒にさせていただく機会を得たんですね。その頃、そういった活動をされているある会の代表に、私はいかような者で、こういうところから来ましたという話をさせてもらって、最初、私は僧侶だから煙たがられるかなと思っただんですね。そして20年前でも結構様子は変わっていて、「今頃ですか？」みたいな言われたんですね。「がん患者さん、がん

患者家族さんは、ずっと待っておられたんですよ」っていうことを聞いて、すごくショックを受けたんですね。自分が実は、がん患者さんとか家族さんの哀しみとか苦しみのおそばにご一緒させていただくという気を持っていかなかったんじゃないかなど、すごく反省したんですね。それでそういうふうにご一緒させていただいたり、一緒に話を聞いたりという機会を得るようになりました。

がん患者さんは、医療体制も変わる中で、誰にも相談できないということをお教えられたんですね。手術を受けたり、抗がん剤治療を受けたりして、いざ通院だと病院に行って先生に相談しようと思っても、先生は毎日何十人、何百人という患者さんを診ないといけないから、お医者さん自身はそんな思いは毛頭ないと思うんですが、どうしても受け答えが決まった形になってしまう。看護師さんに聞こうと思っても看護師さんの数も減ってクラークさんが案内されたりすることが多くなって、クラークさんに聞こうと思っても、クラークさん自身は状況がわからなかったりすると。そういう中であってすごくストレスがたまってきたりします。家に帰ってきて家でしゃべればいいかといえは、高齢の方は家にひとりの人もいるし、若い人は若い人で自分のことで家族を暗い思いにさせたり、子どもが自分のことを心配したりという

ことがあつたら言えないということ、ひとりで悶々とされるわけですね。そういう方が月に1回でもお集まりになって、お互いが苦しい心の内とか、しんどさとか、いつまた発病するかという不安とかに直面されているお姿に出会ったんですね。そういうふうな方々とぜひご一緒させていただきたいと思って活動させていただいております。

その後、お寺の仕事もだんだん両親も歳をとってきますし、いざという時に私が必要だということもあつたんで、高齢者施設での勤務をこのまま続けるのが難しいなと思つていたんですが、その時に病院の当時の副院長に紹介していただいて、今の緩和ケアを中心とした病院でチャプレンとして入職するお誘いをいただきました。そちらに行くことになりました。

私の目的としては、個人としては僧侶として苦しんでいる人、哀しみを持つている人と一緒にいたいということがずっとあつたんですけど、日本に帰ってきた当初の目的に、日本の医療の現場においても、こういうふうな話を聞かせていただいたり、患者さんに寄り添う者というものが絶対に必要だから、その立場という役割を普及していきたいという思いがありました。チャプレンというのはこういうふうな形で仕事をしているということが公的に位置付けされると、私が病院からいなくなつて

も、病院の中でそういう立場が確立されていったりするわけですから。

ある時患者さんから「歩こうと思うんで一緒に歩いてもらえませんか」って言うてもらったことがあつたんですね。すごく嬉しかったですよ。私の仕事というのは、そういうふうなお仕事かなど。

Q. お仕事の中でどういうことを大事にして、どういうお話をされるのでしょうか？

笠原さん 緩和ケアというのは、これまで大事にされてこられた価値観がすべて失われていくんですね。今まで大事だったお金という価値観だったりとか、地位とか名誉だったりとか、仕事の役職であつたりとか、大きな家に住んでいてとかそういう社会的なものだったりとか、そういうものが失われて裸一貫になつていかれるんですね。そういう中であつて、大事なものを模索されていく機会であつたりもすると思うんですね。家族と友人との愛情であつたりとか、自分の生きてきた証であるとか、自分らしき、そういうものをあらためて見つめていかれる、そういうふうなところに接させていただく、私自身もすごくその人の生き方に感化されていくということがありますね。

患者さんのところや、家族さんのところ

にいくと、言葉としてはいろんなことを言われるんですね。たとえば「死にたい」とか「殺してほしい」とか、それから家族に對しても「出ていけ」であるとか。けれどもそれってというのは淋しいっていうことの裏返しであったりとか、本当に結びつきたいっていうことだったりとか、どうしようもない憤りであるとか、そういうふうなところに共感していくというか。僕も、すごく大好きな先生、その方も今病床にいますけど、その方の大好きな言葉があった、「哀しみは、哀しみを知る哀しみに救われ、涙は涙に注がれる涙に助けられる」と。私自身もお話を聞いていく中で、その方が今心の中にある哀しみであったり、憤りであったり、イライラであったり、そういうふうなところに寄り添ってあげればと思いますし、そういうふうなところで話を伺いすることが大事なのかなと思います。

それがお話ということだけでなくて、形としては、たとえば一緒にお散歩をして、花を愛でたりすることがその気持ちに共感できることであつたりとか、その人とコンビニに一緒に買い物に行ったりすることが共感できることだったりとか、言葉に出るものとか、体で表わされるものとかは違うところがあると思うんですね。その心根のところでは淋しきだったりとかしんどさだったりとか、そういうふうなところで

ご一緒できればなということとは常に思っていますね。

ある時ね、患者さんが、いろんなものをなくしていかれてね、やつあたりとか暴力とかが激しかった方がいらつしやるんですね。その方がふと、うちの病院の玄関先で、「笠原さん、僕明日から歩こうと思うんですよ」と。ちょうど身体機能を失ってこられて自分で歩くことができなくなってきた時期だったんですけど、「歩こうと思うんで一緒に歩いてもらえませんか」って言うてもらったことがあつたんですね。すごい嬉しかったですよ。私の仕事というのは、そういうふうなお仕事かなと思つていますね。

ある時は病院で憤りが激しくて、自分の病気が受け入れられない、仕事に戻れないことが受け入れられない、家庭に戻つていけないことが受け入れられなくて、すごい怒りの形相で周囲にあたり散らして暴力的になつていらっしゃるつしやつたんですけど、その方のお話をお伺いさせていただいて、社会人として戻れない、仕事に戻れない、家庭人に戻れない、そういうふうな憤り、苛立ち、イライラ、そういうふうなことを話すだけ話して、わーっと泣いてしまわれた方がいらつしやいましたけど、私も泣けてきましたね。そういうふうな苛立ちやストレスをご一緒させていただくことも私の仕事かなというふうに思いま

す。

それは患者さんだけでなく、家族さんもね、たとえば若い人だと、ご本人も苦しいですけど、お父さんお母さんも苦しいですよ、自分より先に娘、息子が逝つてしまふ、それを何もできずに見守らないといけないわけですから。

(患者さんが) 現役の方だと、一家の主としての責任感もあるし、自分が守つていけないといけないと思われるんですよ、だから自分の哀しみも表出できないんですよ。奥さんも自分の子どもさんも労らないといけない、そういうふうな中で自分というものをきっちり守つていかれるわけですよ。それがある途端に、せきを切つたように崩れられる、そういうふうな場面にやっぱりお一人だとつらいんですよ、家族にも見せられないこともある。そういうふうなところにちよつとでも一緒にできれば、何にもできないんですけど、共にいるということは、そのお父さんも助けられるし、私も助けられるんですよ。なんかそういう感覚がありますよね。

よく仕事のことを、英語で Calling (コーリング) という呼び方をすることがありますけど、天職とかいう意味になるんでしょか。私自身も、私自身が寄り添わせていただいている、お話を聞かせていただいている、サポートしている、支援させていただいているということよりも、私

自身も大きな力に守られるというか、そういうふうなことをすごく感じる瞬間だったりするのかなと思います。

これまで代えがたいご縁をいただいていた方々が、今でも語りかけてきてくれる。命が終わったとか終わらないというふうなことを超えて、生命として一貫性を持って、自分を導いていってもらえる。

Q. 普通に考えると、そういうところに寄り添われるのは、しんどかったり、つらかったりすると思うのですが？

笠原さん しんどいですよ。もちろんつらいですし、悲しいですけど、一方でそういうふうなご縁をいただけるといっても、すごく特別なところがあると思っっているんです。患者さんが探し求めておられる命の集大成を迎えておられる中で、本当に大切なものであるとか、尊敬という言葉が正しいのかわからないですけど、そういうふうなものに出会っていかれるのに、私自身も一緒にいける、それはなかなか経験できないと思うんですよ。

私はそういうふうなものの経験を大事にする場が宗教だと思っっているんですよ。それを神というか仏というか仏性というか言い方は様々で受け取りもあるとは思

うんですけど、その思いに共感できたりとか、家族さんの思いに自分も一緒にできるといいうのは何物にも代えがたいものがありますから大事にしたいと思いますよね。

今まで毎年100人以上の方が亡くなつてこられています、そうした方々と代えがたいご縁をいただけてきて、その方々は今でも語りかけてくれるんですね。自分を奮い立たせていただいているというか。今、違う患者さんと出会わせていただいて、その哀しみに対して何ができるか考えさせていただいているんですけど、そのバックには、今までご縁をいただけてきた患者さんがいらつしやるんですね。それを幽霊というなら幽霊といってもいいんだと思うんですけど、全部支えてくれているんです。それっていうのは、命が終わったとか終わらないというふうなことを超えて、生命として一貫性を持って、自分を導いていってもらえるというか。それはやっぱり心強いですし、自分はけっこういやらしい心を持っていたりとか、いやしい心を持っていたりとか、計算高い心を持っていたりとか、いろんなことがあると思いますけど、そういうものを超えて、導いてただけているというのは大きいかな。

死というのが日常から離れてしまっている環境的なことというか、考えないとい

けないなと思います。

Q. たとえば、若くしてお子さんを亡くして、なかなか立ち直れない方がおられたとしたら、笠原さんだったらどういうふうに寄り添われますか？

笠原さん もう立ち直れないんだつたら、立ち直れなくてもいいように、一緒にできたらなと思います。自分がその人を殺してしまったんじゃないだろうかとか、自分が十分なことをしていけなかったからこんな風になっちゃったんだらうとか、すごく悔やまれて、次へ進めない方が多くおられます。昔から宗教というのはたとえば7日ごとの中陰っていうものがあったり残された方の思いをちよつとずつ聞いていって、その中で自分の心の整理をつけていただいて、そういうふうな中で「死」というものを自分の中で受け入れて、そこから出発していける風土という文化があったと思うんですけど、それが壊れてしまっていると思うんですよ。

亡くなるのが高齢者施設なのか、家なのか、病院なのか色々ですけど、そこでの死というのが全部バラバラにあるんですよ。死ぬというのは、その人個人のものでなくて、家族にとつても死であるし、友人にとつても死であるし、そういうのが共有できてないと思うんですよ。だからなかなか自分が死というものを死として受

け入れて、また歩みを再び始めるといいうのができなくなっているの、僕は、その人がそこで立ち止まっておられるなら、立ち止まっている理由があるんだろうと思うし、受け入れられない心の根っこの悔しきであったりとか、憤りであったりとかがあると思いますんで、そういうふうなところをご一緒にさせていただきたいと思えますし、その人はやっぱりどこかで思っているのかなと思います。あえて再出発できないからしないといけないとは思いません。死というのが日常から離れてしまっている環境的なことというか、考えないといけないなと思います。

どこまで共感できているのかわからないんですけど、それでも思いに寄り添いたい。

Q. 必ずしも同じ経験があるわけではない方に対して、チャプレンとしてどういった聞き方をされるんでしょうか？

笠原さん がん患者サロンに行つた時に、同じ歳の人に、「しよせんあなたには私の気持ちはわからない」と言われたことはあります。その時もずいぶんショックを受けて、その時はそれに対して十分な答えができてなかったと思いますし、わからないことがたくさんあると思うんです。共感

できないところもあると思うんですけど、一方で私も病院でも病院以外のところでも出会いを持たせていただいて、ご縁をいただいで、大切な人をそういう意味では亡くしてるんですよ。だから、私の共感できるところというのがどこまで共感できているのかわからないんですけど、それでも思いに寄り添いたい、それというのは、これまでご縁をいただいてきた方々との出会いが大きいのかなと思います。

亡くなる方が何を私たちに遺していくか
れるかですよね。

Q. 県の「死生懇話会」でも、死は、社会の中にあるものとして、そこから生きていることとか、人とのつながりを考えていけな
いかなという趣旨でスタートしているところがあります。そういったことを日々お
感じになつているのかなと。

笠原さん ありがたいことには、お亡くなりになつた方がメインのエレベーターを使って、正面玄関から葬儀社の車に乗つてホールに向かわれるということがあります。医師から看護師、我々スタッフまで玄関先で全員でごあいさつすることができる。他の患者家族もその様子をご覧になる方もあります。自然のこととして受け入れておられるのでしょうか。亡くなる方が

何を私たちに遺していられるかですよね。大病院は裏口であつたりとか、霊安室も目立たないところにあつたりしますけど、ぜひ滋賀県がされる病院はこういうことを大事にしてほしいなと思います。